

〈研究論文〉

学部生対象のキャリア教育における 対話的問題提起学習の提案

野々口ちとせ ・ 岡崎 眸 ・ 後藤美和子
秦 松梅 ・ 趙 一章 ・ 房 賢嬉

【要旨】

社会に送り出す最終学府としての大学学部教育において、職業キャリア、及びそれにとどまらない、生活全般に関わるライフ・キャリアを視野に入れたキャリア教育の構築は喫緊の課題となっている。本研究の目的は、この課題の達成に言語教育がどのように貢献できるかを探ることであり、特に日本語教育の領域で使われてきた対話的問題提起学習という教室活動に注目する。学生が自らのキャリアを能動的・主体的にデザインできるか否かは、外から与えられる様々の情報や知識がリアリティをもち、自己と関連付けて捉えられるかどうかにかかっていると考えるからである。具体的には、卒業後5年以内の本学卒業生に半構造化インタビューを実施して、このインタビューをもとに対話的問題提起学習のためのテキストを先輩テキストとして作成し、対話を促す問いを付して教材化した。

キーワード：グローバル化、キャリア教育、先輩テキスト、自己の拠点、
対話的問題提起学習

1. はじめに

グローバル化の変動の中で、経済の右肩上がりを前提とした日本型の終身雇用制度は崩壊し、＜大学卒業→就職→結婚（子育て）→定年＞といった従来型のライフコースは見直しが迫られている。近年は、若者の雇用をめぐる、早期離職者や新卒無業者、非正規雇用の増加といった様々な問題が明らかになっている。こうした中、多くの大学がキャリア教育の重要性を認識し、多様な教育を展開している。それらの大半は就職のための講座や資格取得の講習、業界研究や就職に関連したインターンシップであり、出口指導の早期対策として位置付けられているのが現状である。特に就職と直結したスキルや資格取得など、従来、専門学校でしか取得できなかった様々の国家資格の取得が大学でも目指されるようになってきた。

それでは、大学は専門学校とどこで差別化されるのかという問いが生じる。働き方改革が叫ばれ、企業で働くだけでなく、起業や副業、趣味、地域貢献など様々のキャリアが同時に

追求される社会が展望されている現在、就職活動を目的とした職業観や勤労観だけでなく、自分の生きる社会をどのように捉え、そこで自分はどのように生きていきたいかという人生観にも焦点をあてたキャリア教育が必要とされている。

大卒の就職が好転しているとはいえ、団塊世代の大量退職による一過性のものに過ぎない可能性もあり、労働市場の一層の流動化や外国人労働者の参入、AIをはじめとする技術革新が見込まれる中で、学部生が卒業後のライフコースを自信をもって切り開いていける基盤作りを学部教育が提供することは極めて重要であり、キャリア教育はその中核を担うものであると考える。

本研究は、社会に送り出す最終学府としての大学学部教育において、職業キャリアにとどまらない、生活全般に関わるライフ・キャリアを視野に入れたキャリア教育の構築に言語教育分野がどのように貢献できるかを探ることを目的とする。

2. キャリア教育と対話的問題提起学習

キャリアとは何か。文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」（2004）では、「働く」形態としてボランティアや趣味など多様な活動があるとした上で、「キャリア」を「個人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」（文部科学省 2004:3）と定義している。この定義によると、キャリアという概念は、就業経験だけでなく、生きていく上での幅広い活動や実践、価値観の形成・更新の履歴を指す。また、キャリアは、人と環境の関係性、時間と空間の幅、個別性を含むものとしても捉えられている（渡辺・大庭・藤原 2007）。

高等教育におけるキャリア教育で設定されている教育目標は何か。国立大学協会（2005）では、①夢や目標を育む（あるべき姿から生き方を考える思考）、②職業観を育む（職業人としての自立）、③自ら考え学ぶ力を育む（個人としての学習と自立）、④自己表現力を育む（論理的思考力やコミュニケーション能力の強化）の4項目を挙げている。これらは、大学でのキャリア教育をきっかけに生涯を通じて追求される目標と言える。教員には、学生が学ぶための「気づき」を支援する方策・環境づくりの工夫が求められ、どの科目でも展開可能で、課外活動も含めて全学的に展開されることが期待されている（国立大学協会 2005:4-5）。

文科省がキャリア教育の推進を打ち出してから15年が経とうとする現状はどうだろうか。キャリア教育は上述のとおり全学的に取り組むものと考えられている。いわゆるキャリアデザイン科目以外の科目を担当する教師、具体的には日本語教師を対象にした寅丸ほか（2018）によると、キャリアについての認識が教育機関、日本語教師、留学生という三者の間で「ずれ」が生じているという。また、狭義の就職支援を「キャリア支援」、人生について考えることも含めた教育を「キャリア教育」と分けて、大学などの教育機関では「キャリア教育」を重視すべきであるとする提案が示されている。

江利川（2017）では、「キャリアデザイン」科目の授業が、大学生の自己成長の自覚尺度

と主体的自己尺度に影響があったとする結果が示された。また、授業とともに、授業以外の学生生活（サークル・部活動やアルバイトなど）が学生のアイデンティティ獲得に影響があったことも示唆されている。このことから、「キャリアデザイン」の授業の目標がアイデンティティの形成にあり、それが一定程度成果を挙げていることがわかる。しかしながら、授業の内容がどのようなものであったのかについての詳細は明らかでない。

家根橋ほか（2019）は、人間形成・市民性形成という観点から留学生のキャリア形成に日本語教師がどう関わっていくのかに関して、大学・短期大学の専任・非常勤の日本語教師 4 名にライフストーリー・インタビューを行った。その結果として、教師自身の経験や現在置かれている立場や環境により、キャリア教育のとらえ方や関わり方には異なりがあることが報告されている。このことから、教師自身の生き方がキャリア教育への関わり方に大きく影響していることが分かる。ただし、この場合も各教師たちがどのような授業展開をしているかについては明らかではない。

以上をまとめると、第一に、大学では、キャリア支援だけでなく、キャリア教育が必要であること、第二に、キャリア教育によって、自己成長の自覚としてのアイデンティティ形成が達成されていること、第三に、キャリア教育の捉え方には教師の生き方が影響を及ぼしている可能性のあることが分かった。

ここから以下の二点が示唆される。一つは、キャリア教育の目標は、学部生における自己成長の自覚やアイデンティティ獲得などにみられるように、学部生自身が自己をどう捉えるかに関わっていることである。もう一つは、キャリア教育においては、一つの正しいゴールが設定され、その達成を目指した授業デザインではなく、個々の教師の自主的な関わりが許容されていることである。

しかしながら、先に見たように、これらの指摘の前提となる具体的な授業の内容や教室活動については報告されていない。例えば、学部生の自己成長の自覚を促す授業とはどのようなものであったのか。あるいは、教師の生き方が実際の授業にはどのように反映されていたのか。本研究では、この二点を踏まえ、キャリア教育の教室活動として対話的問題提起学習の導入を検討したい。

対話的問題提起学習とは、フレイレが識字教育において提示した課題提起学習（problem posing）に起源を持ち、日本語教育へは、アメリカの移民対象の英語教育における展開を経て 1980 年代に導入されたものである。日本語教育においては、対話的問題提起学習として対話性が強調されている。対話的問題提起学習においては、①生活の中から問題を発見して提起（＝問題提起用のテキスト作成）し、②その問題を巡って対話を重ねることを通して、③相手に共感し相手の視座を取り込み（＝対話後の考察）、④人間的繋がりを形成し、⑤問題解決の主体として自己を形成することが追求される（岡崎 2009:105-109）。

教室活動としての対話的問題提起学習は問題提起から始まる。問題提起をするには、自分の生活の有りようをよく観察し、それを理解することが必須である。言い換えれば、自分が

どのような世界に生きているか、自分の生活をどのように見ているか、外部から入ってくる情報をどのように捉えているかが問われる。つまり、リアリティをもって現実を見ることが促されると言える。さらに、この問題提起を承けた対話により、他者（対話相手）の問題の見方、捉え方を知ることになる。対話を通して自分たちは同じ考えをもっていると互いに感心する場合もあるが、これまでの筆者らの経験からは相違点のあることに互いに気付くことの方が多い。また、最初は同じ考えだと了解していたことが、対話を重ねることによって、次第に相違点が浮かび上がってくることもある。この相違点の発見こそが対話の意義であり、そのことによって、まず、自己の起点が明確になる。自分とは何か、どういう考え方をする人かを知ることになる。次に、自他の違いが意識化されることにより、自分とは違う他者の視座を取り込むことが可能となり、自己成長につながる。例えば、もともと自分が持っていた選択肢だけでなく、他者の選択肢の存在を知ることによって、選択肢が二倍になるといったケースである。そして、この過程で、相互に人間的繋がり、共同体の萌芽が形成される。共同体の形成は、問題解決に向かう主体としての自己を確立することに繋がる。

以上の特徴をもつ対話的問題提起学習はキャリア教育の教室活動からは次のように特徴づけられると考える。キャリア教育の目的は、単純化すれば、卒業生を、丸腰ではなく、戦う武器をもって社会に送り出すことである。そのために、近年では、労働法やブラック企業の見分け方などを授業に取り入れるといった取り組みなどもなされている（上西・今野・常見 2013）。

しかしながら、そのような外からもたらされる知識や情報を学部生は果たしてリアリティをもって捉えられるだろうか。他人事ではなく自分のこととして、自己を起点にして考えることができるだろうか。翻って考えてみれば、現在の学部生にとって、自分たちが受けてきた教育のどの段階においても、外から与えられる知識や情報を自己を起点にして考える機会は殆どなかったといってよいであろう。従って、その結果として、自分は何を拠りどころにして生きているのか、自己の拠点をあらためて問い直す機会もなかったと言える。

自己の拠点とは何か。本研究では、岡崎の「四つの問い」（岡崎敏雄 2009）から浮かび上がってくる自己像であると捉える。第一の問いは、自分は、どのように社会を捉えているか、世界認識に関わる問いである。第二の問いは、自分は、どのように物事を判断しているか、行動基準に関わる問いである。第三の問いは、自分は、どのように他者と関係を作っているか、人間関係構築に関わる問いである。第四の問いは、自分は、どのような人間か、アイデンティティに関わる問いである。以上の四つの問いに対する答えから、自分とは何を拠点にしている人間かが明らかになる。

一方、教育は確かな知識を得る場とされている。確かな知識や確かなスキルの獲得が重視される。特に初等教育から中等教育まではそうである。そして、近年、グローバル化の進展の中で即戦力養成が重視され、大学などの高等教育機関でもその傾向が強くなってきている。知識やスキルの獲得の程度が定期的になされる試験によって測られ、その延長線上に自己像

が出来上がる。つまり、どのぐらい知識やスキルを持っている人かという角度からしか自己を捉えられなくなる。

ところが、大学を卒業し社会に出て、自分の人生を切り開いていくためには、自己の拠点が明確でなければならない。エントリーシートを書く時、あるいは面接試験を受ける時、それまでの教育の中で問われることのなかった問い、自分はどのような人なのか、何を抛りどころにして生きている人なのかという問いに突然直面することになる。ここに対話的問題提起学習導入の意義がある。対話的問題提起学習においては、先に述べた四つの問いから分かるように、自己の拠点が何かが、明示的にせよ暗示的にせよ、常に問われるからである。しかし、一方で、自分の生活を見つめ、そこから問題を発見し、提起するタスクには、学部生はそもそも馴染みがない。先に述べたように、そうした経験はこれまでの教育の中で殆どしていないからである。従って、この学習の導入においては、最初から自分で問題を発見しテキストを作成する代わりに、他者が書いたテキストを使うことから始めることが妥当であろう。この場合の他者のテキストは、自分に近く、その意味で親和性があり、リアリティをもって捉えやすい内容のもでなければならない。そうしたテキストを使って、提起された問題の理解を目指して仲間と対話を繰り返す中で、相手との異同も明確になり、自己の拠点が意識化されることが期待される。具体的には、自分より少し先をいっている身近な先輩が問題提起をするテキストであり、以下では、先輩テキストと呼ぶ。

3. 研究課題

以上を踏まえて、本研究では、本学の学部生を対象とする対話的問題提起学習用の「先輩テキスト」作成を課題とする。同じ大学で学んだ先輩自身が、学部生時代、あるいは卒業して社会人となって、キャリアをめぐる意思決定に直面して、迷い、戸惑い、時には途方にくれながら、選択することの積み重ねを通して、自分とは何かを改めて問い、どう生きていったらよいかを辿ったテキストである。よくあるように、成功した人の成功談を提供し、そこから成功の秘訣やヒントを学び、自分の生活に適用することを狙うものではない。本学の学部生にとって、いわゆる成功談はこれまでの自分の経験を重ねたり、身近で切迫性をもって感じられたりすることが少なく、他人事になりやすいであろう。

一方、対話的問題提起学習は、教師にとっても、馴染みの薄い活動であることが多い。そのため、対話的問題提起学習を読解活動として誤解してしまうことも少なくない。読解活動ではテキスト内容の理解が目標とされる。教師は、学習者のテキスト理解を促すための問いや、学習者がどの程度理解できたかを調べるための問いなどを与え、学習者はそれらの問いに答える。この場合、テキストの内容理解がゴールとされ、対話は応用課題であり、オプションなものとなる。従って、対話的問題提起学習として展開されるためには、テキストだけでなく対話を促す問いの提示も重要であることが分かる。

4. 研究方法

先輩テキストをどのように作成するか。先に述べたように、先輩テキストとは、学部生にとって少しでも自分の先を行く先輩が、自分のキャリアを追求するにあたって、戸惑い、時には葛藤を抱えながら、自分とは何かを改めて問い、どう生きていったらよいか、自分なりの道を辿ったテキストを指す。先輩に直接テキストを書いてもらうという方法も考えられるが、本研究では、以下に示すように間接的な方法をとった。つまり、卒業後5年以内の本学のある学部の卒業生を対象として、就職・進学を選択や現在の職場を巡る問いを中心に半構造化インタビューを実施し、そこで収集された卒業生の語りをリソースとして、本研究チームが先輩テキストを作成する方法を採用した。

調査協力者は、個々の先輩の個別性を重視して、職種別（販売業、観光業、事務職など）、日本人学生・留学生ごとに、できるだけ偏りなく選ぶことにした。調査協力者の一覧を表1に示す。インタビュー項目として表2の項目を準備し、調査協力者の話しやすい項目と順番で話してもらった。インタビューは一対一の対面で、調査協力者の母語で、一人あたり1時間から1時間半程度行われた。インタビューは調査協力者の了承を得て録音し、文字化し、必要に応じて日本語に翻訳した。文字化資料の中から、問題として語られていることを抽出し当事者の声を保持しながらテキスト化した。そのテキストに対し、対話を促し、自己の拠点を明確にすることが期待されるような問いをつけた。以下では、典型例と考えられる加藤、陳、キムの3名を取り上げ、作成した先輩テキストとそれぞれに付した問いとその狙いを述べる。

表1 インタビュー調査協力者

協力者（仮名）	国籍	性別	職 業
加藤	日本	男性	建築関連
山田	日本	男性	自営業
川口	日本	女性	語学学校
キム	韓国	男性	事務職
パク	韓国	男性	イベント関連
チョ	韓国	女性	貿易関連
陳	中国	男性	銀行
王	中国	男性	航空関連
孫	中国	女性	貿易関連

表2 インタビュー項目

- ・日本に来るまでのこと。
- ・なぜ日本に留学しようと思ったか。
- ・城西国際大学（〇〇学部）を選んだ理由
- ・卒業したらどうするつもりだったか。
- ・（留学生対象項目）なぜ日本で働こうと思ったか。
- ・なぜ今の会社を選んだか。
- ・今の仕事について。

5. 卒業生へのインタビューをもとに作成した先輩テキストによる対話的問題提起学習

5.1. 日本人卒業生 加藤さんの場合

日本人の卒業生、加藤さんの先輩テキストを取り上げる。加藤は卒業を前にして進路の選択に大いに悩んだ。学部で好きな英語を勉強し、その継続として大学院を受験し合格した。しかし、人とのコミュニケーションで使いたい気持ちがあまりない自分を感じたこと、更に、優秀だと一目置かれていた院卒の先輩が畑違いの不動産屋に就職したことに疑問をもったことから、合格を辞退し大学院進学をとりやめた。誰しもが認める国家資格のような「証明」が欲しいと思った加藤は、父親が建築士であることから、自分にもある程度適性があるのではないかと考え、2年制の建築学科（短大）の道を選んだ。建築学科では死ぬ気で勉強した。2年生の終わりに就職活動をし、今は昼間は設計会社で働き、夜は、国家資格を取るために資格学校に通っている。加藤は、短大の2年間もそして現在の仕事と夜学の両立も厳しいが、大学で過ごした日々が心の支えになって頑張れていると語っている。

（卒業するときに、2年制の建築学科に行こうか、大学院に行こうか、迷う時期があった。）英語が好きで、入学したまでは良かったんですけども、人とのコミュニケーションで使いたいかっていう気持ちが、そこまでなかったの。自分のそういった部分で、向いてないなっていうふうに、学校生活を送る中で、感じるようになりまして。（大学院で）勉強しようっていう考えも、選択肢の一つとして当然ありました。（合格）通知は、頂きました。建築に興味があるかないかでいったら、正直、よく分からなかったんですけども、ただ、父親が、建築士の免許を持っていたので。それなら、自分にも、ある程度、適性があるんじゃないかなってふうに思っ。

大学院を辞退した理由の一つ、もう一つあるんですけども、当時、自分が学科の4年生だった頃に、こちらの大学院生で、当時の自分の学科長（の）、これ、イメージなんですけども、結構、助手的な感じの、悪く言えば、そういうイメージの方が、いらっしやったんですね。こちらを卒業した後に、たまたまなんですけども、自分の通っている小さなスーパーの中に、不動産屋さんがあるんですよ。そちらで、働いてる姿、見たんですよ。その姿を見て、迷いが生じたというんですか。なおかつ、その不動産さんは、父が経営している会社の、知り合いの会社だったんです。自分のやっぱり、第一印象は、なんで英語じゃないのかな。あるいは、外国語に関するものじゃなくて、全く畑違いの分野なのかなっていうのが、やっぱり初めに考えたんで。それで、自分の中で、疑問を持つようになりました。（不動産屋のような）そういう道のために、大学院に行きたいと、自分は思えないなっていう。もちろん、いろんな方がいるんで、やっぱり一例にすぎないとは思いますが、自分の中では、やっぱり、学科長の隣でやってたという方

だったんで、ある程度、認められてる人なのかなっていう印象を抱いてたんで。結果的に、2年間勤めて、自分の、地方に、実家に帰ったっていう話を聞いたんですけど。

大きなのは、やっぱり根底に、自信を取り戻したいっていう気持ちがあつて。建築士を目指せば、結果的に国家試験に合格して、免許を取って、なるしかないんですよ。そういう、証明といえますか、それが欲しいなっていう、かなり、心境になりまして。英語で一生懸命やってきた先輩が、そういう姿で働いていて、自分も、仮に英語一筋でやってきたとしても、その先にどんな形で残るのかなっていう考えになりまして、それならもっと違った形で証明が欲しいなっていうふうになって、そういう考えを持つようになりました。

ただ、ちょっと話がそれるんですけども、ずっと卒業するまで、やっぱり自分の心のホームは、JIUにあるんだな、というのは、感じてました。(どうしてか) 分かんないですけども、自分でもよく分からないんですけども、ずっと、(外は) アウェーにいるような。建築学科も、アウェー。自分のホームというのは、いつも JIU にあるなっていうのは、感じてました。今もそう思ってます。やっぱり自分にとっての、卒業した大学は、ここなんだなって。

加藤は卒業後の進路を考える際、学部と同じ英語の道に進むか、別の道に進むか迷う。その過程で、「英語を学ぶことは好きでも、コミュニケーションで使いたいという気持ちがあるけど、そこまでない」という自己認識や、「英語で一生懸命やってきた先輩」が不動産屋という「畑違いの分野」で働く姿を見て、卒業後のライフコースを選ぶ自分なりの基準(専門を生かした仕事をしたい)に気づき、大学院を辞退する。建築に興味があるかどうかは分からなかったが、「父親が建築士の免許を持っていたので、それなら自分にもある程度適性があるんじゃないか」と、身近な人物をリソースにして選択の幅を広げる。そして、根底に「自信を取り戻したい」気持ちがあることに気づき(自己認識)、「国家試験に合格して、免許を取って」「(形として残る)証明が欲しい」という自分なりの価値基準を見出し、建築士を目指す意思が固まっていったことが窺える。

これから自分のキャリアを考える大学生たちも、それぞれの問題に遭遇した際に、自分はどういう人間で、何を大事にしているのか、どういう基準で仕事を選ぶのか、といったことを考える必要に迫られるだろう。その際に、一握りの成功者の話を参考にするのではなく、加藤のような身近な群像の悩みを想像力をもって追体験し、彼の自己認識や価値観について、対話の相手と、それぞれ自分はどうかを述べ合うことで、自己を相対的に捉え、自分なりの基準を見出したり、あるいは新たな基準を構築するきっかけが得られるのではないだろうか。また、加藤の選択に対し、自分だったらどうするか(行動基準)を考え、述べ合うことで、それぞれが問題に遭遇した際の選択の異同に気づき、結果として選択の幅が広がることが考えられる。

また、加藤はインタビューの中で学部時代を捉え返し、「自分の心のホームはいつも JIU にある」と述べている。特にゼミの議論の場にいると気持ちが安定し、「いろんな違った意見を聞く」のが好きだったと言う。こういう経験が生きる基盤となり、建築学科での大変な毎日を支えるエネルギーになったことが考えられる。これは、湯浅（2007）が“溜め”と呼んだものに相当する。“溜め”とは何か、以下に湯浅（2007:26-27）より抜粋する。

“溜め”は、溜まり、水溜まりを想像してもらえばいい。ただ地面に水が溜まっているだけでなく、人がその溜まりの中に浸かっているような、それに包まれているようなイメージだ。胎児が羊水に浸かっている、そんなイメージでいい。（中略）この“溜め”には二つの働きがある。一つは、外からの衝撃を吸収する働き。“溜め”が大きければ大きいほど、大きな衝撃に耐えられる。逆に“溜め”が小さければ、小さな衝撃でも本体に届いて、体を痛めつけられる。もう一つは、栄養源としての働き。“溜め”はエネルギー源でもある。大きな“溜め”があれば、たくさん吸収してパワーアップ可能だ。

“溜め”について考えることは、自分がどのようなつながりの中で生きているか考えることでもある。自分のエネルギー源は何だろうか。自分が何によって支えられているか気づくことで、自分が他者にとっての“溜め”になることも可能かもしれない。

以上のような対話活動を行うことにより、自己の拠点に気づき、将来どのように生きていきたいかというライフコースを考えるきっかけを提供することが可能になると考える。そこで、岡崎（2009:106-107）を参考にし、以下の問いを設定した。

問い

1. 英語を専攻した先輩が不動産屋に就職したのを見て、加藤さんががっかりしたのはなぜですか。加藤さんの考え方をあなたはどのように思いますか。
2. 加藤さんは「自信を取り戻したい」がためには「証明」が必要で、その証明を得るために建築士の道を選択しました。この加藤さんの考え方についてどう思いますか。
3. 加藤さんが考えた卒業後の選択肢（①大学院・②2年制の建築学科）について、どう思いますか。あなたなら、どうしますか。
4. 加藤さんが建築学科で頑張ることができたのはどうしてだと思いますか。あなたにとって、そのようなものはありますか。

<問い 1>は、加藤が卒業後の進路選択に迷ったことに着目して作成した。不動産屋で働く先輩の姿を見て失望し、大学院への進学を辞める選択をした加藤は、「なんで英語じゃないのかな」「全く畑違いの分野なのかな」という語りから、仕事を選ぶ基準として「大学での専門を生かして就職しないといけない」という考えを持っていることが窺える。加藤のこ

のような基準に対して自分は思うのか、同じなのか違うのか、違うとしたらどういう基準を持っているのか、自分が加藤だったら大学院への進学を辞めるだろうか。まず言語化してみることで、自分の行動基準がはっきりし、自己の拠点に気付くであろう。また、不動産屋の仕事であっても、コミュニケーションは大切なことから、「全く畑違い」とは言えないのではないか、という議論が出てくることも考えられる。

<問い 2>は、加藤が建築士の仕事を選んだ根底に「自信を取り戻したい」、そのためには証明が必要だという考えがあったことに着目した。加藤はかつて自信を失うような出来事に遭遇したことが窺えるが、「自信が持てない」という悩みは多かれ少なかれ誰しも持っているであろう。加藤は「国家試験に合格して、免許を取って」「(形として残る)証明が欲しい」と考え、それが仕事を選ぶもう一つの基準となった。この加藤の考えに対し、自分は思うのか。自分だったらどういう基準で仕事を選ぶか。

<問い 3>は、加藤が卒業後の選択として考えた 2 つの進路（大学院に行く、短大の建築学科に行く）について、自分はどう考えるか、自分だったらどうするかを考えるものである。対話の中でそれぞれの考えを出し合うことにより、問題に直面したときの選択肢や解決へのヒントを得ることが可能となる。

<問い 4>は、“溜め”について考えるものである。湯浅（2007:27-30）は、様々なものが“溜め”としての機能を持っているとし、具体的には、金銭の“溜め”（貯金）、人間関係の“溜め”（例えば、親、友人、食事をおごってくれる人、就職を世話してくれる人、しばらく転がり込ませてくれる人）、精神的な“溜め”（例えば、自分に自信がある、自信があって気持ちにゆとりがある）を挙げている。精神的な“溜め”があれば、外からの衝撃に対しても落ち着いて対応ができる。逆に“溜め”がない人はちょっとした事態であわててしまう。些細なことで、いっぱい、いっぱいになってしまう（湯浅 2007:27-30）。“溜め”の形は人によって様々である。加藤自身はコミュニケーションが苦手で、ゼミの議論でも専ら聞く側であった。そして、その経験が自分の今を支えている。自分にとっての“溜め”は何か考えておくことで、自分を支えているものを意識化し、困難に直面した際の備えとすることができるだろう。

5.2. 中国人卒業生 陳さんの場合

中国人の卒業生陳さんの先輩テキストを取り上げる。陳は、（4 年制大学ではなく）3 年制短大を卒業したため当時中国国内での就職は難しかった。そこで、両親の勧めもあって日本の大学への進学を考え、来日した。大学別科を経て学部に進み、卒業後は、家族に銀行勤務の者がおり仕事の事情なども分かっていたので、迷うことなく日本にある中国系銀行に就職し、5 年が経った。陳の目下の最大の悩みは、この 5 年間、窓口業務だけで他の業務をやらせてもらっていないことである。窓口業務では将来が見えない。そのため、ストレスはたまる一方で、今の仕事には限界を感じている。

私の来日動機は、日本の最新技術に対する興味・関心ではなくて漫画と動画が好きで日本へ行ってみたい気持ちがあった。当時、専門学校を卒業しても中国国内での就職は難しかったので、両親は、外国の大学への進学を考えた。それでこの大学に入った。中国と日本の架け橋のような仕事をしたかった。

大学三年生の時、就活を始めた。親が銀行で働いているので、銀行の仕事には自信があった。でも、仕事は本当に忙しい。例えば、先週の金曜日、私は 16 時まで昼食をとることができなかった。給料は他の日系銀行と比べると低い。私は結婚して二人だから、今の給料では少し足りない気がする。さらに子どもが生まれたら、やっていけないかもしれない。もうすぐ就職して 5 年にもなるのに、ずっと窓口業務で、仕事の内容はほとんど変わらない。このことが今一番不安なことだ。＜中略＞それに、会社で日本人に話す時はどのように話したらいいか、その都度、前もって考えなければならない。また、誰かが用事があって休暇をとった場合は、人手が足りず他の銀行から人を借りるしかない。一方、自分では、銀行の仕事に詳しいと思っていたが、実は銀行の仕事はもっと複雑であることが分かった。私は学部の専攻が教育だったので、今の仕事の内容とは合致していない。色々勉強を始めなければならず、おかげで白髪が増えた。さらに、年末になると、扶養、減税、保険のようなこともやらなければならない。入社する前に、これらのことを少しは聞いてはいたが、これほど大変だとは思わなかった。入社後、具体的なことについて、誰も説明してくれないから、よく分からないことが多い。仕事をするようになって、だんだん体重が増えてきたが、原因は、隠れストレスのせいもあると思う。

まとめて言うと、私は窓口業務だけではなく、銀行のすべての業務を把握したい。10 年後も窓口をやっているのかと思うと実に切なくなる。このことは、私の将来に関わっていると思う。この仕事を辞めたら、あるいは辞めさせられたら、私はどうすればいいのだろう。貯金もなく、他の業界の仕事もできない場合、どうするのか。将来の仕事の方向が見えない。今後にはいろんな可能性がある。今の仕事をやり続けるか、それとも、新しいことを始めるか。今のような窓口業務がずっと変わらなければ、転職か、あるいは帰国も考えなければならない。

銀行の窓口業務とは毎日決まった作業を決まった方法や手順でこなしていく仕事を指す。このような業務は単調な手順の繰り返しであり、仕事に慣れるとともに次第に仕事の面白さが感じられなくなる。グローバル化の進展による世界的な競争激化、人件費カットのプレッシャーの下で、多くの職場で、最大限の省力化・合理化が追求され、その結果、多くの仕事がマニュアル化され、窓口業務のようなルーティンワークが増えている。そして、業務が一旦ルーティンワーク化されると、その仕事には熟練が不要となり、働く人の代替が簡単に行えるようになる。結果、賃金は低く抑えられ待遇が悪くなる。一部を除けば、大卒であって

も多くの卒業生が、就職してこうしたルーティンワークに従事する可能性は高く、陳はまさにそうしたケースとして考えられる。就職する前に陳の職場での経験を追体験し、仲間と対話をすることで、そうした場合に対する備えを作っておくことは重要であろう。

陳は「銀行のすべての業務を把握したい」と仕事に対する強い意欲を持っているにも拘らず、「もうすぐ就職して 5 年にもなるのに、ずっと窓口業務で、仕事の内容はほとんど変わらない」状態におかれている。また、彼が働いている中国系銀行の給料は「他の日系銀行と比べると低く」、「結婚して二人だから、今の給料では少し足りない」。そして「さらに子どもが生まれたら、やっていけないかもしれない」として銀行の待遇に不満をもっている。「学部の専攻が教育だったので、今の仕事の内容とは合致していない」と感じ勉強の必要性を感じているが、具体的な方法は思いつかない。それだけでなく、「この仕事を辞めたら、あるいは辞めさせられたら、私はどうすればいいのだろう」と将来への不安を募らせている。しかし、「今のような窓口業務がずっと変わらなければ、転職か、あるいは帰国も考えなければならぬ」と述べ、不安を解消する現実的・具体的な方法は考えられていない。

陳は、職場に不満をもち、さらに辞めさせられるかもしれないという不安を抱えている。しかし、陳がこの不満や不安を職場の同僚と共有している様子は窺われない。また、窓口業務だけでなく他の業務にもつきたいという要望を上司に訴えたり、あるいは、5 年間も同じ窓口業務だけをさせられていることに対して抗議の声をあげたりしたという形跡もない。これらのことから、陳は、働く人が職場で感じる不満や不安はその人の個人的・私的なものであり、関係者みんなでその解消や解決のための方策を考え行動に移すような公的なものではないと捉えている可能性がある。会社は誰のものか、経営者のものか、株主のものか、社員のものか、社会のものかという議論があるが、陳は、会社は経営者のものであり、社員が経営の仕方 (= 社員の働かせ方) に口をはさむべきではないと考えているかもしれない。つまり、陳は、社員は経営側の指図に従って働くものという考え方を前提にしている。今後の可能性として、陳は「今の仕事をやり続けるか、それとも、新しいことを始めるか」と述べており、退職し他の仕事を探すことにそれほどの抵抗感はない。

現代社会では、雇用なしで生きていくことは難しい。しかし、金融や資本に加え人の移動も国境を越えて自由になされるグローバル社会では雇用の流動化は激しくなる一方である。南から北への労働力の移動は常に賃金低下の圧力を伴う。複数の仕事に従事するパラレルワークが、会社のためではなく自分のために働ける、新しい魅力的な働き方としてマスコミなどを通じて注目されている。労働法の保護対象から外れる個人事業主も増加し、自助・自己責任の強調が社会的風潮になっている。

卒業して働く職場の実態を知り、それを踏まえて、自分は、仕事に何を期待するか、どのように仕事をしたいか、同僚たちとどんな関係を築きたいか、何を幸福と感じるか、自分はどうのように生きていきたいか、をめぐって考え、他者との対話を繰り返しながら、社会に出る前に、ライフコースに対する確固とした自己の拠点を構築することが求められる。そこで、

岡崎（2009:106-107）を参考にして、以下の問いを設定した。

問い

1. 陳さんは、職場で日々どんな経験をしていますか。
2. 陳さんはどのような問題だと捉えていると思いますか。
3. そのような陳さんの問題の捉え方をあなたはどのように思いますか。
4. もし、あなたが陳さんだったら、どう感じ、どう行動するでしょうか。
5. あなたは、将来、どのような仕事に就き、そこで何をしたいですか。それはなぜですか。

<問い 1 と問い 2>は、先輩の陳は、職場で日々どんな経験をしているか、そして、それをどう感じ、どういう問題として捉えているかを確認するために設定した。就職活動においては、日本人も留学生も、内定をとることが優先され、就職後の実際の仕事は何をすることなのかを考える機会は少ない。銀行の窓口業務というルーティンワークがどのようなものであるか、自分がそのようなルーティンワークをしている一コマ一コマを具体的に想像し、陳の残念で悔しい思いを共有したい。その時、あるいは、自分の地域の銀行の窓口でかけられた銀行員の思いやりにあふれた助言を思い出し、ルーティンワーク＝単調な単純作業と言い切れない、積極的な人間的な交流の存在に気付くことがあるかもしれない。対話の中で、ルーティンワークが増えてきた社会的背景や AI の普及で今後どのように変化していくかなど、議論を広げていくことが可能である。

<問い 3 と 4>は、陳の置かれた職場の現実や陳の気持ち・悩みを理解した上で、陳の問題の立て方・捉え方に対して、自分はどう感じ、どう考えるか、整理するために設定した。職業に貴賤はないとされているが、3K 労働ということばが存在する。建設・土木、ゴミ処理、警察官や看護師、介護士などは貴賤でいえば賤の仕事であり、弁護士、会計士、医者などは差し詰め貴の仕事であろう。しかし、よく考えてみれば、きつい、汚い、危険の 3K 労働は例えば、医者の仕事にも当てはまる場合がある。特に救命救急の現場で働く勤務医の仕事は長時間労働で壮絶を極めると言われている。仕事自体に貴賤があるのか、それとも社会的な位置づけにより貴賤が生じているのか、議論が分かれるところであろう。もし、後者なら、例えば、賃金や労働条件などを見直すことで改善に繋がられるであろう。そして、その見直しに向けて、現場で働く人には何ができるかを考えることができる。

同じように、職場に不満を感じた場合、何らかの行動をすることでその不満を解消し、働きやすい職場に変えるという選択肢がある。しかし、陳は、今後も窓口業務が続く場合は、退職し他の会社を探したいと述べている。陳の職場の捉え方、及びそれに基づく行動基準に対して、自分はどうかを言葉にして、対話の相手とやり取りをする。その過程で、自分の会社・職場の見方や行動基準が自覚できたり、あるいはさらにそれを見直し、新たな会社・職場の見方や行動基準を構築したりすることが可能となる。

最後の〈問い 5〉は、グローバル社会における雇用の実態をよく理解した上で、自分は働くことで何を達成したいか、どのような働き方をしたいか、どのように生きていきたいかを考え、そこに見られる自分の世界認識や行動基準などを意識化し、自己の拠点の構築に繋げることを追求する。

5.3. 韓国人卒業生 キムさんの場合

韓国人卒業生キムさんの先輩テキストを取り上げる。就職活動で何度か失敗を経験し、ようやく事務職員として働くことになったキムは、日本で働くための絶対条件として「日本人モード」で生きることをあげている。職場においては「日本人モード」で働き、プライベートにおいては「外国人モード」に切り替えることで生活が「楽」になるという。しかし、「日本人モードで働くと、ものすごくストレスが溜まるんです」というキムの語りからは、日本人への同化（日本人のように話して日本人のように振る舞い、日本人のふりをする）を余儀なくされた状況の中で、キムが生きづらさを感じている様子が窺える。仕事から家に帰って外国人モードへ切り替えてから言い放つ「何見てるんだ、くそっ！」がその生きづらさを端的に表している。

まずは、日本語を上達させるべきです。絶対に、確実に。単に N1 を持っているから上手というわけじゃないですから。N1 はみんな持ってるし。もう少し日本語を日本人らしく話せないといけません。あと、もう一つこういうのがあったらいいと思いました。ホワイトカラーだから、そんな傾向が強いと思いますが。なんというか、ここは田舎だから日本色が薄いということもあります。都会に出たら文字通り「日本」なんです。外国人モードと日本人モードというのがあるんです。いつも優秀だった人がみんな言うには、都会に行って日本の会社に就職したければ日本人モードが必要だということですね。みんなが言うには。日本人のように話して日本人のように振る舞って、日本人のふりをしなきゃ、日本人のふりをしなきゃいけない。日本人の真似をしなきゃいけない。それが絶対必要です。

〈中略〉

最初は何がなかったかと言うと、私が街に出て都市の、ここ（＝東金）は日本色が薄いからここじゃなくて、都市の話ですけど、私が歩いているときに電話したり韓国語で話したら、みんなジロジロ見るんです。「あいつ、何だ？」こんな感じで。それがものすごく怖かったです。自分と違うのは排斥するじゃないですか、基本的に、日本人は。そういう面があるから、それが最初は。今、考えてみると敏感に反応する必要なかったかもしれないけど、当時はとても敏感に反応していて、ジロジロ見られたり、さらにアルバイトするときは、竹島はどこの領土か聞かれたこともあって、日本人に。とても困る、答えにくい、そんなことを「された」というべきかな？ されたというより、当然

なことだから今は、今は、まあ気にしないんです。日本が長い子たち、その子たちが言うには、最初は私みたいに少し敏感になって萎縮してるんですね、とても。「ビビリ」になっている。4、5年くらい働いていると、仕事をするときには日本人モードで働くんです。だけど、家に帰ってプライベート。プライベートと分けるんですよね、仕事と。家に帰ったら「何見てるんだ、くそっ！」って韓国語で言う。そうやって、そうやって少し…仕事とプライベートが分けられるようになって、少しこう楽になるというか、慣れたら…。でも、日本人モードで働いていると、ものすごくストレスが溜まるんです。

キムが行動基準にしているのは「いつも優秀だった人」、「日本に長く住んでいる子たち」の声である。日本のやり方に合わせればうまくやっていけるという処方箋は、適応するためのコツにはなるかもしれないが、真の解決策にはならない。なぜなら、日本社会にうまく適応している「優秀な人」の声は、日本社会への同化を間接的に要請しており、それが結果的にキムを生きづらくしているからである。

上記の問題は、キムのみでなく多くの日本在住の外国人が抱えている問題であり、外国人留学生在がこれから直面する可能性の高い問題でもある。日本学生支援機構の調査によると、日本で就職する外国人留學生は年々増加傾向にあり、約3割が日本国内で就職している（日本学生支援機構 2019）。また、外国人留學生の日本国内での就職率を現状の3割から5割に引き上げるという目標が掲げられており（内閣府 2016）、日本で就職する外国人留學生はさらに増える見込みである。

一方、職場における多文化共生への道はまだまだ遠い。企業の求人と留學生の求職に関する意識を比較した調査によれば、留學生側は日本人と同程度の高い日本語力を持つことは難しいと認識しており、それを克服するために、自分の優位性として「外国人特性」を重視してほしいと思っているのに対して、企業側は留學生の異文化性よりも日本社会で問題なく仕事ができるような「日本人との同質性」を求めているという（横須賀 2007）。職場における共生を実現していくためには、外国人（参入側）の日本人（受け入れ側）への同化ではなく、異質性をどのように受け入れていくか、双方の可能性を阻害することなく能力を発揮できるようにするために何ができるかを両者が積極的に考えていくことが重要であると考えられる。

将来共に働く可能性のある留學生と日本人学生がこれから直面するかもしれない問題について共に考え、問題解決に向けて主体的に関わろうとする態度を養うことがキャリア教育において必要ではないだろうか。そこで、岡崎（2009:106-107）を参考にし、以下の問いを設定した。

問い

1. キムさんは、いつ、どのような経験をしましたか。
そのとき、キムさんはどんな気持ちだったと思いますか。
2. キムさんの職場の日本人はキムさんと働くことをどう思っているのでしょうか。
3. キムさんはこれをどのような問題だと捉えているのでしょうか。
4. キムさんの考えについて、あなたはどのように思いますか。
5. あなたがキムさんだったら、あなたはどの感じ、どう行動しますか。

＜問い 1 と 2＞は、先輩（キム）が置かれている状況を確認しながら問題を把握するために設定した。問題を特定するために、いったい何が起こっており、キムや周りの人々が何をどう感じているか想像力を働かせながら探る。次に＜問い 3 と 4＞では、問題の原因や自分のものの見方・考え方について考察する。キムや周りの人々が何を問題として捉えているか、そこにはどのような社会的・文化的・個人的背景があるかを考える。最後に＜問い 5＞では、この話が自分のことだったら、どう行動するかを考える。自分は何を基準にして行動するのか、その基準はどのような価値観に基づいているのかを、まず意識化することが目的である。対話を通して留学生と日本人学生双方が自分の考え方の枠組みや規範を批判的にふり返ることで、当然だと考えている前提を明らかにすることができると考えられる。「日本のやり方に合わせればうまくやっていける」というこの社会の支配的言説を無批判的に受け入れるのではなく、それを問い直す活動を通して問題の解決に向けた新たな考え方の枠組みを作ることが可能であろう。

6. まとめと今後の課題

以上、対話的問題提起学習のための三つの先輩テキストと問いを提示した。加藤のケースでは進路選択をめぐる提起された問題、陳のケースからは就職後の職場におけるルーティンワークをめぐる提起された問題、キムのケースからは外国人が日本の職場で働くことをめぐる提起された問題を取り上げた。以下では、この三つのテキストを使って対話的問題提起学習を行う際の手順に着目して、どのように教室活動として展開するか、対話のステップを岡崎（2009:106-107）を参考にしながら整理し、次に、残された課題をまとめる。

6.1. 対話的問題提起学習における対話のステップ

以下のようなステップを踏んで教室活動を進める。

(1) 事前課題（課外）：「対話のためのメモ」の作成

先輩テキストを読む。先輩たちのそれぞれの経験の追体験を目指し、想像力を駆使して読む。読んだら、先輩テキストに付された問いに沿って、答えを言語化し、「対話のため

のメモ」を作成する。問いは基本的には次のような構造をもっている。

1. 何が起きているか。先輩はどんな経験をしているか。
2. 先輩はどういう問題として捉えているか。
3. 先輩の問題に対する感じ方、捉え方について、自分は、どう考えるか。
4. この話が自分のことだったら、どう感じ、どう行動するか。

対話のためのメモの作成という言語化の作業は、自分と向き合わなければならない。その意味で、自己の拠点が何かに気付くことが可能となり、重要である。言語の教室で行われる読解では主に上の問い1が中心となるが、対話的問題提起学習では、問い1は問い2～問い4を考える上での前提という位置づけである。従って、重要なのは、問い2～問い4であり、そこでこそ、自分と向き合うことが可能となり、その結果として自己の拠点を明らかにすることが可能となる。周（2019）はこの言語化の作業の重要性を自身の経験に基づいて指摘している。他方、唐（2019）では、中国の日本語専攻の授業（口訳）で実践した対話的問題提起学習を取り上げ、上記の1の問いと答えで活動が終わり、問い2～問い4まで拡張していくことの困難性が述べられている。

（2）対話活動（教室内活動）

各自事前課題として課外で作成した「対話のためのメモ」を持参し、それをもとに対話を行う。対話の間中、適宜メモをとるようにする。まず、問い1～問い4のそれぞれの問いに対する答えを、メモを参考にして互いに報告する。相手の答えをよく傾聴することに努める。次に、その答えに対して、理解を補足するための質問や深めるための質問を行う。この確認や質問に対してもよく考えて答えるようにする。このようなやりとりを通して、相手と自分の間にある共通点や相違点をよく考え、自己の拠点を知る契機とする。

（3）事後課題（課外）：「対話後の考察」の作成

対話中とったメモを参考に記憶を確かめながらできるだけ詳細に「対話後の考察」を書く。相手と自分の答えに見られる異同をできるだけ明確にし、そうした異同の背後にどのようなことが考えられるか、考察を深める。この過程で、考えを深めるために調べたいことがでてくるかもしれない。例えば、関係者にインタビューをしたり、あるいは関連する情報をネットで検索をしたりすることで、考えの幅を広げたり深めたりすることができる。

（4）対話後の考察の共有（教室内活動）

課外で事後課題として書いた「対話後の考察」を持参し、ペア、グループ、クラス全体などで共有する。この時、インタビューや調べ活動をやった場合には、その結果も含めて報告する。先に述べたように、仲間との対話により、新たな視点や考えに気付くことがある。しかし、思考の深化や思考の拡張を図るには、対話により考えたことを踏まえてさらなる情報の追求が重要である。この場合の情報の追求は自分の知りたいことを調べることであり、いわば自分の生き方と関連付けられていることに留意したい。

6.2. 今後の課題

以上、先輩テキストとそれに付随する問いを作成し、それを教室活動として使う際の対話的問題提起学習の各ステップを提示した。今後の課題は、この提示を踏まえた教室活動の実践とその検討である。提示は例示に過ぎない。どの教室にもそのまま持ち込めることはないことを重視したい。従って、具体的な実践においては、受講生の背景を吟味し、多くの受講生にとってリアリティをもってこの活動に参加できるように、特に、問いの内容や与え方、あるいは事前課題や事後課題、インタビューやネット検索などの調べ活動を教室内の対話活動とどのように組み合わせるか、などの検討が必要である。また、教師において、この対話的問題提起学習を教室活動として展開するに際して、どのような困難に遭遇したか、そして、その困難をどのように捉え、問題解決を図ろうとしたか、などについて調査し、検討することが必要である。周（2019）では、同一のテキストを使って対話の回数を重ねることや互いのテキストを対話の対象とすることの意義が指摘されており、具体的な教室活動の展開においては考慮する必要がある。

また、今回 10 名の協力者を得てインタビューを行ったが、先輩テキストはそのうちの 3 名から作成したに過ぎない。残りの 7 名のインタビューから、あるいは、今回の 3 名のインタビューからもさらに違う問題提起用のテキストの作成は可能である。

さらに、今後の見通しとしては、受講生が自分の生活から問題提起をしテキストを作成していく活動に繋げていくことが重要である。今後の課題としたい。

付 記

本稿は城西国際大学学長所管研究奨励金による研究成果の一部である。なお、インタビューに快く応じてくださった「先輩」のみなさまに感謝と敬意を表します。

【参考文献】

上西充子・今野晴貴・常見陽平（2013）ブラック企業の見分け方-大学生向けガイドー

<https://www.iwate-u.ac.jp/career/file/blackkigyoku.pdf>（2019 年 9 月 8 日アクセス）

江利川良枝（2017）大学における初年次のキャリア教育—大学生の発達課題とアイデンティティ形成に着目して—、『名古屋学院大学論集 社会科学篇』53（4），231-244.

岡崎敏雄（2009）『人間生態学としての言語生態学に基づく持続可能性言語教育の理論と実際』JSPS 科研費（19652045）研究成果報告書.

岡崎敏雄（2010）持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイン—教室活動・シラバスデザイン・教師の役割—、『筑波大学地域研究』31，1-24. 筑波大学.

岡崎眸（2013）持続可能性日本語教育—言語教育への生態学的アプローチ— 学士課程教育における意

- 義一.『日本語言語文化研究会論集』9, 1-17. 政策研究大学院大学.
- 亀山俊郎 (2009) キャリア教育からシティズンシップ教育へ?—教育政策論の現状と課題. 2008 年労働政策研究会会議報告 ワーク・ライフ・バランス (WLB) の現状と課題.『日本労働研究雑誌』51, 92-104.
- 国立大学協会 教育・学生委員会 (2005)『大学におけるキャリア教育のあり方—キャリア教育科目を中心に—』<https://www.janu.jp/active/txt6-2/ki0512.pdf> (2019 年 3 月 14 日アクセス)
- 鈴木寿子・トンプソン美恵子 (2013)『グローバル化社会を生きるための力を育成する授業—持続可能性日本語教育に基づいた授業デザインと成果—』JSPS 科研費 (23720260), JSPS 科研費 (24720231) 研究成果報告書. 人間生態学としての言語生態学研究会.
<http://sustainability.nomaki.jp/index.htm> (2019 年 3 月 13 日アクセス)
- 周亜芸 (2019) 中国における留守児童共同体生態場構築の探求—対話的問題提起学習を援用して—.
城西国際大学学位請求論文
- 唐曉煜 (2019) 持続可能性日本語教育の実践研究—中国の大学日本語教育における中上級専門科目の可能性—.
城西国際大学学位請求論文
- 寅丸真澄・江森悦子・佐藤正則・重信三和子・松本明香・家根橋伸子 (2018) 留学生のキャリア意識とキャリア支援の「ずれ」を考える—日本語学校・短大・大学(首都圏・地方)の留学生の語りから.『言語文化教育研究』16, 240-248. 言語文化教育学会.
- 内閣府 (2016)『日本再興戦略 2016』
https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2016/0602/shiryo_04.pdf (2019 年 9 月 8 日アクセス)
- 日本学生支援機構 (2019)『平成 29 年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果』
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/inti_student_d/data18.html (2020 年 3 月 14 日アクセス)
- 文部科学省 (2004)『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～ 児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために～』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm (2019 年 9 月 8 日アクセス)
- 文部科学省 (2018)『外国人留学生の就業促進について (外国人留学生の就職に関する課題等)』
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/job/_icsFiles/afeldfile/2018/12/05/01_ryuugakusei_monkasyou.pdf (2019 年 9 月 8 日アクセス)
- 家根橋伸子・佐藤正則・寅丸真澄・松本明香 (2019) 留学生のキャリア意識とキャリア支援の「ずれ」を考える 日本語学校・短大・大学(首都圏・地方)の留学生の語りから.『言語文化教育研究学会 第 5 回年次大会 市民性形成と言語文化教育 予稿集』226-237.
<http://alce.jp/annual/2018/#program> (2019 年 3 月 14 日アクセス)
- 横須賀柳子 (2007) 企業の求人と留学生の求職に関する意識比較.『留学生教育』12, 47-57.
- 湯浅誠 (2007)『貧困襲来』山吹書店
- 渡辺三枝子・大庭さよ・藤原美智子 (2007) 序章 キャリアの心理学に不可欠の基本. 渡辺三枝子著『新版キャリアの心理学 キャリア支援への発達のアプローチ』ナカニシヤ出版, 1-22.

A proposal for DPPL (Dialogic Problem Posing Learning) designed for career education for undergraduate students

Chitose Nonoguchi, Hitomi Okazaki, Miwako Goto
Songmei Qin, Yizhang Zhao, Hyeonhee Bang

Abstract

Achieving challenges related to career education, which encompasses vocational careers as well as wide range of life careers is one the most urgent tasks in the education for undergraduate students as the final educational institution. The principal aim of this study is to explore how language education can contribute to achieve this task.

We focus on a classroom activity, Dialogic Problem Posing Learning (DPPL), which has been long practiced and highly evaluated in the field of Japanese language education.

We pay a special attention to a massive amount of the following possibility of DPPL for achieving the challenges above mentioned.

That is, the success or failure of the career education of the kind of nature described above depends upon whether the students, the party concerned, themselves can design their own career both actively and on their own initiative. Moreover, the success or failure of this design is solely dependent upon whether wide range of information and knowledge provided from outside is perceived as the kind and quality with which the students could appreciate these pieces of information and knowledge as those which can induce profound, in terms of immanent and inherent reality, from their point of view, rather than from outsiders' views. This, in turn, is heavily dependent upon whether students can feel these information and knowledge as the kind that they can inherently feel to be relevant to themselves, their ways of feeling matters, ways of seeing their own lives as well as ways of viewing their surrounding world.

We interviewed graduated students (foreign as well as Japanese students of JIU) who had graduated within past 5years.

Based on qualitative analyses of those interviews, we first produced texts for DPPL as "Senior Students Texts". Secondly, we produced and attached questions to the texts as teaching materials which are designed to facilitate the dialogs among learners.

Key words: Globalization, career education, Senior Students text, ones' own foothold
Dialogic Problem Posing Learning,